

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、10 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 額の汗を拭いながら、山道を歩く。
- (2) 氷上の華麗な舞に拍手が沸き起こる。
- (3) 木陰のベンチで憩いのひとときを過ごす。
- (4) 街を循環するバスが新緑の並木道を走る。
- (5) プランターで栽培したトマトが赤く色づく。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) クモの切れ間から太陽が顔を出す。
- (2) 高原の牧場でニュウギユウが草をはむ。
- (3) 外国へ行くために、リョケンの発行を申請する。
- (4) 前夜にフって積もった雪が、朝日を受けて輝く。
- (5) 開会式で、ガクタイの迫力ある演奏が競技場に響き渡る。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

「その投げ方じゃ、だめだな。」

いきなり背後から聞こえた声に、純也はびっくりして、ボールを投げようと振り上げていた手を思わず止めた。

振り返ると、伊予灘の角に沈もうとしていた夕陽が目に飛び込んで、相手が黒い影にしか見えなかった。草叢に立つ自分より背の高い影が、また声を上げた。

「その投げ方じゃ、カーブは曲がらないぞ。」

純也は夕陽にグローブをかざし、相手の顔を見た。てっきり年長の男児だ、と思っていた影が、スカートを穿いているのに気付き、よけいにびっくりした。

両手を威張ったように腰に当て、仁王立ちしている恰好は、スカートを穿いていなければ、年長の男児にしか見えない。このあたりでは見かけない顔だった。

(1) 「何だ？ おまえは……。」

純也は驚かされたことに腹が立って、ぶっきら棒に言った。

「だから、その投げ方じゃ、カーブは投げられないって言ってるんだ。」
相手も怒ったように言い返した。

純也はたじろいだ。しかしすぐに相手が自分とそう年が変わらない少女だということに気付いて、

「放っとけ。」

と怒鳴り返した。

純也はボールを投げていた廃工場の壁にむき直って、左足を上げ右腕を

背後に引いた。投げようとした瞬間、

「だめだって、それじゃ。」

と相手が大声を出し、純也の指先を離れたボールはとんでもない方向に転がってしまった。

ハッハハハ、相手が笑った。純也は頭にきて少女を睨み付けた。

「おまえ、うるさいんだよ。あっちへ行け。」

それでも少女は白い歯を覗かせて、笑っている。純也は舌打ちをして、ボールが消えていった草叢の方に走り出した。ボールを拾い、マウンド代りにしていた場所に戻ろうとすると、少女はまだそこに立っていた。純也は相手を無視することに決めた。

純也は壁にむかってボールを投げた。力んで投げているのだが、上級生の投手が投げるようにカーブが上手く投げられなかった。同じ歳の少年の中では、純也が一番速い球を投げることができると自負していたし、ストライクを何球も続けて放ることができた。来春、三年生になれば、町内の年少組の野球部に入れる。そこで純也はピッチャーをやりたいかった。しかし少女が言ったように、カーブが上手く曲がらない。

——うん？

純也は投げるのを止めて、首をかしげた。

——なぜ、あいつ、俺がカーブを投げる練習をしとるのがわかったんだ？

純也は少女の方を振りむいた。少女は同じ姿勢で立っていた。

「あのお、その握り方じゃ、ボールは曲がらないんだよ。」

——握り？ 何を言ってるんだ、こいつ……。

(2) 純也は眉を上下して、少女を見直した。

聞き慣れない言葉遣いもそうだが、相手の言い方にはどこか自分を馬鹿にしているような感じがあった。

「じゃ、おまえがカーブを投げられるんなら、投げてみろや。」

純也が言うと、少女は、いいよ、と平然とした顔で歩み寄り、純也の手からボールを取り、壁にむかつて背筋を伸ばして立ち、ボールを握った左腕を二度ぐるぐると回転させた。

——サウスポーか……。

純也が胸の中でつぶやいた時、少女は右足をゆっくりと上げ、右手を前に突き出し、左手を大きく上げて一気に振りおろした。ボールは壁の手前でブレーキがかかったようにカーブし、純也が壁にチョークで描いていたストライクゾーンの真ん中に当たり、ポンという乾いた音を立てた。

(3) 純也は口を半開きにして、壁と少女を交互に見た。ボールもよく曲がったが、それ以上に少女の投げたボールには迫力があつた。

——な、なんだ、こいつは……。

少女は少し不満そうな顔をして、首をかしげていたが、純也を見てにこりと笑った。そうして草叢に入り、ボールを拾って戻ってくると、ボールを握った手を純也に見せた。

「ほら、人さし指と中指をこうやって少し外にずらすんだ。やってみな。」
純也は少女が握って見せたやり方で、ボールを握ってみた。

「違ふよ。もう少し外にずらすんだ。」

純也が指をずらすと、ボールが手からこぼれ落ちた。少女はボールを拾って純也に渡し、ぎこちなくボールを握っている純也の指の上から彼

女の指を覆い被せるようにした。温かい手だった。

「ほら、こうだよ。親指もしつかり握ってないとだめだ。ちいさい手だな……。でも毎日練習すれば握れるようになるよ。」

そう言われて少女の手を見ると、純也よりひと回り大きかった。

「こうしてごらん。」

少女は言って、左手の人さし指と親指の腹を合わせて、パチンと音を立てた。純也は右手の指で同じようにしたが、音など出なかった。

「ボールを放す時、この感じで放すんだ。すぐにできなくても、きつとできるよ。」

そう言って少女は左手を振りおろしながら指で音を立てた。

「はあ……。」

(4) いつの間にか少女にうなずいている自分に気付いて、純也は唇を噛んだ。

「おまえ、どこの誰や?」

純也が言って顔を上げると、少女はもう草叢のむこうまで走り出して、頑張れよ、と男のような言葉を残して立ち去った。

「チェッ、何が頑張れじゃ。」

純也は舌打ちし、右手の人さし指と親指を鳴らそうとしたが、何も音はしなかった。

(5) 周囲を見ると、すでに陽は落ちて晩秋の薄闇が原っぱにひろがるうとしいた。

「あつ、いけねえや。」

純也は言って、あわてて走り出した。

(伊集院静「どんまい」による)

〔問1〕「何だ? おまえは……。」とあるが、このときの純也の気持ち

ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 自信があるカーブの投げ方を否定されたことに不快を感じ、親しげに話しかける少女の態度に反感を覚えている。

イ 少女から怒りをあらわにして声をかけられたことで恐れを感じ、どう答えてよいか分からずにとまどいを覚えている。

ウ 見ず知らずの少女から不意に声をかけられたことで動転するとともに、自分が驚かされたことに怒りを覚えている。

エ 自分の投げ方をからかわれたことにいきどおるとともに、いつまでもしつこく冷やかしてくる少女に困惑を覚えている。

〔問2〕(2) 純也は眉を上下して、少女を見直した。とあるが、純也が「眉を上下して、少女を見直した」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア カーブを投げられないわけを丁寧に指摘しながらも、馬鹿にするかのような態度を取る少女の気持ちをはかりかね、不安に思ったから。

イ カーブの練習をしていることを見抜くとともに、自分の理解できないことを言う少女が、どのような人物かを確かめたいと思ったから。

ウ 学年で一番速いボールを投げられることに誇りをもって自分を見直して、絶対に見返してやろうと思ったから。

エ 少女がカーブの投げ方を教えてくれたことに驚き、初対面の自分に對して親切に接してくれているのはなぜかと不審に思ったから。

〔問3〕⁽³⁾ 純也は口を半開きにして、壁と少女を交互に見た。とあるが、

この表現から読み取れる純也の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 目の前にいる少女が自分を圧倒するほどのボールを投げたということが信じられず、何が起きたのかを確かめようとしている様子。

イ 見事なカーブを投げた少女が実力をひけらかすような表情を見せたことに驚いて、どうしたらよいか分からずにあきれている様子。

ウ ボールがあまりにも大きく曲がったことをおかしいと思い、少女が何か巧妙な手段を使って投げたのではないかと疑っている様子。

エ 少女の投げたボールが自分の投げるボールとは比べものにならないほど速かったことに慌ててしまい、ひどく取り乱している様子。

〔問4〕⁽⁴⁾ 一つの間にか少女にうなずいている自分に気付いて、純也は唇を噛んだ。とあるが、このときの純也の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア カーブの投げ方を少女から細かく教えてもらっているにもかかわらず、上手に投げられないことに情けなさを覚え、悲しく思っている。

イ 少女の言うとおりにいくら練習しても、カーブを投げられるようにならないのではないかとというあせりを覚え、心もとなく思っている。

ウ 初めて出会ったのに熱心に教えてくれる少女への感謝を、うまく言葉で伝えられない自分にもどかしさを覚え、腹立たしく思っている。

エ 知らず知らずのうちに少女の実力を認めさせられ、反発しつつも結局は素直に従っている自分にふがいなさを覚え、悔しく思っている。

〔問5〕⁽⁵⁾ 周囲を見ると、すでに陽は落ちて晩秋の薄闇が原っぱにひろがるうとしていた。とあるが、この表現について述べたものとして

最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 純也が少女からカーブの投げ方を教わった瞬間の情景を、晩秋の夕暮れの鮮やかな色彩に着目して絵画的に表現している。

イ カーブを投げる練習に没頭していた純也が我に返る瞬間を、晩秋の日没の情景に重ね合わせて印象的に表現している。

ウ 指を鳴らそうと思ってもできなかった純也が失望した瞬間を、闇が広がっていく晩秋の情景によって象徴的に表現している。

エ 少女の実力に驚かされた純也の動揺と晩秋の夕陽が沈んでいく瞬間とを、巧みに描き分けて対照的に表現している。

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

明治時代の書に関する論争からはじめたい。書を、芸術（美術）の範疇

とするかについて、明治十五年（一八八二）、小山正太郎こやましょうたろうと岡倉天心おかぐらてんしんとの

間で、「書は美術か」という主題で繰り広げられた。洋画家である小山は、

書を美術とするのに否定的で、書は言語としての符号にすぎず、人はそ

の内容である詩や句などに感動するのであって書に感動するのではない

とする。それに対して、天心は、書は単に文字を記すだけでなく、そ

の造形を絶えず考究し新機軸を出しているとし、詩句のほかに書自身が与える感動もあるとした。さらに、書が詩句の従属物とするなら、絵画もその描く対象の従属物になると反論した。その後の小山の反論は出なかつたという。今でもこの論争は、書の根源にかかわるものであり、現代にも通用する内容である。(第一段)

もともと中国では、書は三国時代には芸術の範疇でとらえられていた。それに対して画は、宋時代(そう)になってはじめて芸術の仲間になっている。こうした歴史から見ても、わが国では中国の影響を受け、書は長い間、文学や詩と並び、芸術の中心であった。それは、時代が変わっても周知の事実だったのであろう。それにもかかわらず、明治時代の急激な社会状況の変化のなかで、絵画やかつては宗教の一部、信仰の対象であったいわゆる仏教美術、彫刻、そして生活を飾る工芸などがしだいにその存在を確実にし、美術概念として確立されたのと異なり、明治時代のある時から戦前まで、書は美術からみてその外側のものとしてとらえられるようになってしまった。(第二段)

書とは文字を書く以上、素材は文字ということが前提である。そして、伝達手段である文字を素材としている点で、実用性を排除することはできない。つまり、実用の文字からはじまり、その先に芸術性をそなえていくものである。したがって、単に文字を書いただけで、実用の範囲に留まっていたのでは小山正太郎のいうように、感動は生まれにくい。しかし、そこに筆者の文字造形を修練した成果や感情や精神の深さが盛り込まれ、見る側がそれを感じられるようになれば、芸術としての資格がそなわってくるのである。この実用と、芸術の両面を持ち合わせることは、

工芸の実用品が美術品となりえるのとともに、そのほかの芸術との大きな違いのひとつであろうか。(第三段)

(2) また、文字に芸術性を感じさせるようになるには、文字そのものの造形の美しさが不可欠である。どのような形でも構わないが、そこに造形美が表れなければならない。線が太くても、細くても、かすれてもそれらの組み合わせ、線と点画の緊張ある調和の美が必要である。それがあれば、その時の文字が読めなくても、意味が分からなくても第一印象で美しいと感じるはずである。(第四段)

次に造形美を構成する要素にも触れていこう。それには線質や墨色、墨付き部分と余白との釣り合いなどがある。このなかで、線質は、十分な訓練がなされていけばそれだけその人の訴える力となる。墨色は墨の選び方や、磨り方で個人差が生まれる。余白の残し方は、もって生まれた感覚と修練があれば、より美しい響き合いを演出することだろう。(第五段)

こうした条件をそろえた書に造形美を感じることができ、感動することができれば、なにが書いてあるのか読んでみようと思うのが自然の成り行きである。その結果として内容の鑑賞に進むのである。さらにその文字そのものに興味をもてば、作者と同じ筆順に従って書かれた文字を目で追い、作者の筆の動きを追体験することも可能である。この時間を再現しながら鑑賞できるところも、ほかの美術との大きな違いである。(第六段)

また、造形美や書表現を獲得するためには、古典を学ぶことから始めるのが過去から続けられたもつとも一般的で正当な方法である。徹底して古典を習うことで、その古典に内在する書が発する精神性を獲得でき、それを乗り越えて自分自身の形ができあがるといわれる。文字を書かなければならな

いという制約、形を変えながら長い時間をかけて築きあげられた文字としての造形上の制約、それらの狭い制約のなかでの修練こそ、そのものの本質に迫ることが可能であると考えられている。徹底した制約での鍛錬を乗り越えた時は、前のものよりわずかな進歩にすぎないが、それまでの基本をすべて身につけているため、そこに生まれた新しきは堅固なものとなり、時代が進んでも生き残る強さを獲得するのである。古典に立脚しない思いつきによる表現をしても、それは、簡単に崩れ去る可能性が高い。(第七段)

過去の多くの独自性のある名品は、構成や線質、墨色など、まず作品の造形だけで感動できるものであるが、じっくりと観察すると、背景に古典を習得した過程を経て独自性を生んでいることが感じられるものである。古典を超えて新しく獲得する世界こそ、真に新しい美と認められるものであり、思いつきの造形美が世の中に残るには、よほどの偶然と運が必要であろう。(第八段)

そうした、背景がありながら、戦後から昭和三十年代には、ほかの美術に對抗できる芸術であることを示すためか、書の芸術性を模索し定義する活発な動きがあった。そして近年、「文字を素材とする造形芸術である」という定義が一般的になった。この定義は、過去の名品を含むし、これからの書作品づくりの指標ともなる。しかし、文字を素材にすれば、どんな造形でもよいとなると、書的美から逸脱することもありうる。歴史のなかで背負っている書としてあるべきための独自の制約を無視して新しい造形をつくったとしても、その多くは書本来が持つ存在感が感じられないものとしかならないであろう。古典にとらわれず、まったく新しい造形と思うものが生まれたとしても、その作品を分析して見ると偶然か天才的才能により、結果として古

典に見る造形美を踏まえていることになることだろう。しかしそうした例も、きわめてまれなことであり、通常はありえない。(第九段)

ほかの美術にもいえるであろうが、その美術が本来持つ造形美の根源を感じさせなければ、真の進歩、その分野の新しい美は得られない。もし、古典を学んだ後に、文字性を離れた造形美が確立されたとしたら、それは、書の延長線上の、書の周辺の新しい造形美の分野になるのだろう。それが、結果として書の分野と判断されることがあるとしても、認められるまでにはこれから長い時間を経なければならぬはずである。(第十段)

〔注〕 岡倉天心——日本の美術評論家、思想家。

(名見耶明「書の見方」による)

〔問1〕⁽¹⁾ 書は美術からみてその外側のものであり、とらえられるようになってしまった。とあるが、「書は美術からみてその外側のも

としてとらえられる」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア かつて書は文学や詩と並ぶ芸術の中心だったが、明治時代に中国の影響を受け、芸術ではないと認識されるようになったということ。

イ 書は美術として確立している工芸と違い、社会状況の変化のなかで生活を飾らなくなり、実用の範囲から外れるものとされたということ。

ウ 書はもともと宗教の一部として存在したが、仏教美術と同じように信仰の対象を越え、今では芸術の範疇外のものとされたということ。

エ 明治時代から戦前まで、書は実用のものであり、絵画などを含む美術という概念に当てはまらないと認識されるようになったということ。

〔問2〕 また、文字に芸術性を感じさせるようになるには、文字そのもの

の造形の美しさが不可欠である。とあるが、「文字に芸術性を感じさせるようになるには、文字そのものの造形の美しさが不可欠である」と筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 文字に、修練した成果と感情や精神の深さとを盛り込んだ文字造形の調和の美があれば、第一印象で美しさを感じることが出来るから。

イ 文字の造形を美しくすることで、誰でも読むことができるという実用性が高まり、素材の詩句が持つ芸術性も理解できるようになるから。

ウ 書に、実用性がそなわるよう十分な訓練をすることにより、芸術としての資格も同時に持ち合わせることができるようになるから。

エ 美しい墨色や余白の響き合いといった、造形の演出を文字に加えることで、書く人のもって生まれた感覚や個性を反映できるから。

〔問3〕 この文章における第六段の役割を説明したものと最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた書の芸術性について、その中心となる考え方を簡潔に要約することで文章全体の結論を導き出している。

イ それまでに述べてきた書の芸術性を受けて、鑑賞に至る過程を順序立てて解説することで論の展開を図っている。

ウ それまでに述べてきた書の芸術性に基づいて、根拠となる事実を整理することで問題の所在を明らかにしている。

エ それまでに述べてきた書の芸術性に対して、それに反対する立場から別の見解を示すことで話題の転換を図っている。

〔問4〕 古典に立脚しない思いつきによる表現をしても、それは、簡単に崩れ去る可能性が高い。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 偶然か天才的才能によって、古典にとらわれないまったく新しい書表現が生み出されることは、きわめてまれなことであると考えたから。

イ 古典の徹底した制約を守るだけでは、自分が生み出す造形美に時代が進んでも生き残る新しさが加わる余地はないと考えたから。

ウ 書の本質に迫る制約を無視した表現では、書が本来持つ造形美の根源を感じることはなく、時代を乗り越える堅固さがないと考えたから。

エ どんなに古典の造形美を踏まえて独自の表現を工夫しても、過去の名品を超える新しい美をつくることはできないと考えたから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「基本を身につけること」というテーマで自分の意見を発表することになった。このとき

にあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

— 7 —

次の「枕草子」に関する講演の記録を読んで、あとの各問に答えよ。
 なお、本文中の□で囲んだAは、講演で引用された「枕草子」の原文の一部である。また、あとの□で囲んだBは、Aの現代語訳である。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

「枕草子」がどういう風にして書かれたか、出来たかは、多くの方がご存じのように「枕草子」の一番最後にある跋文はつぶんというか、後書きのようなものに書かれています。

A この草子、目に見え心に思ふ事を、人やは見んとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいなう、人のためにびんなきいひすぐしもしつべき所々もあれば、よう隠し置きたりと思ひしを、心よりほかにこそ漏り出でにけれ。

宮の御前おまへに、内の大臣おとどのたてまつり給へりけるを、「これになにを書かまし。上の御前には史記しきといふ書をかみなん書かせ給へる。」などのたまはせしを、「枕にこそは侍らはめ。」と申ししかば、「さば、得てよ。」とて賜たまはせたりしを、…(略)…。

イ おほかたこれは、世の中にかしきこと、人のめでたしなど思ふべき、なほ選り出でて、歌などをも、木・草・鳥・虫をも、いひ出したらばこそ、「思ふほどよりはわろし。心見えなり。」とそしられめ、ただ心ひとつに、おのづから思ふ事を、たはぶれに書きつけたれば、…(略)…。(「日本古典文学大系」による)

これは要点だけ抜粋しましたから短くなっております。

まず最初の段落の「この草子、目に見え心に思ふ事を」「つれづれなる

里居のほどに書き集めたるを」というところは「枕草子」の性格という点で大切であります。

「源氏物語」といえば紫式部むらさきしきぶ、「枕草子」といえば清少納言せいしょうなごんというように、二人は大体同じくらの時代にいましたが、その頃は文学でいえば物語の全盛期でした。現存の物語としては「竹取物語」、「宇津保物語」、「落窪物語おちくぼものがたり」、そして「源氏物語」と成立していきました。

文学の実際の主流は和歌であり、それと並ぶのが物語であり、それと共に日記文学がありました。その当時であれば「和泉式部日記いずみしきぶにっき」などがあります。紀貫之きのつらゆきの書きました「土佐日記」、その後、道綱母の「蜻蛉日記かげろうにっき」、そして「和泉式部日記」があります。

物語というのは実際のことをいいますと、「ものを語る」から物語というわけでございます。では「もの」というのは何かと申しますと、現実にはいない、人間以外の「もの」を「もの」というのであって、現実にはいない「もの」を主人公として書くのです。一番わかりやすいのは「竹取物語」のかぐや姫です。竹の中から出て来たり、最後には天に昇ってしまうことは現実にはないことです。ですから物語は軽く言いますと虚構の世界、または架空の世界、もつと簡単にいえば嘘の世界であるわけです。

それから日記の方も「土佐日記」も冒頭から「男もすなる日記おとこもすなるにっきというものを女もしてみんとてするなり。」と紀貫之が女性になって書き、「蜻蛉日記」にしましても、「和泉式部日記」にしましても、必ずしも正確な記録ではありません。要するに自分を主人公にして描かれた物語、小説、今という私小説みたいなものが日記でした。今われわれがいう実録的な

日記としては、「枕草子」の少しあとに書かれた「紫式部日記」がそれにあたります。

ということは、「枕草子」が、「目に見え心に思ふ」ことを「書き集める」ということは、事実を書くということとして、決して虚構を書くということではないのです。この部分が「枕草子」の反物語・反日記文学性を示しています。

(1) それではどのような過程を経て、「枕草子」ができたかというのがその次であります。

清少納言が仕えていた一条天皇のお后である中宮定子の兄にあたる内大臣の伊周これちかという者が、いわゆる草子、今でいうノートみたいなものを定子に差し上げました。「これになにを書かまし。上の御前には史記といふ書をなん書かせ給へる。」と中宮が言って、草子の一部が清少納言に与えられた、とあります。もし中宮定子が清少納言に草子を与えなければ、現在「枕草子」は存在しなかったかもしれません。

それでは次に何を書こうかというのは、三番目の段落の「歌などをも、木・草・鳥・虫をも、いひ出したらばこそ」というところで、このもらった草子に木・草・鳥・虫などについて和歌を書いたなら、「思ふほどよりはわろし。」とあるように、清少納言は歌が下手と言われたり、あなたの歌の程度がわかるわと馬鹿にされるので書かない、とあります。

当時、ある程度教養があり、文学を解する女性であれば、紙をもらったらたいい和歌を書くと思います。文学的能力があり紙を多く貰えれば、物語や日記を書くかもしれません。しかし、彼女は物語や日記、和歌を書かないとしていたので、今日、われわれがみる「枕草子」のよう

な体裁になってしまったのです。

(2) これが「枕草子」成立事情の一つであります。

(木越隆『「枕草子」の性格』による)

(3) **B** この草子は、わたしの目に映り、またわたしの心に思うことを、よもや人が見ることはあるまいと思つて、所在ない里住いの間に、書き集めてあるのだが、全く無意味なつまらぬことながら、人にとつては不都合な言い過あやまちしもしてしまふような箇所もいくつかあるので、うまく隠しておいたと思つたのに、気がついてみたら、心ならずも世間に洩あはれてしまつていたのでした。

中宮様に、内大臣様が献上しておおきになつたのを、中宮様が「これに何を書いたらいいかしら。主上におかせられては、史記という書物をお書きあそばしていらつしやる。」などと仰せられたのを、わたしが「それは枕でございましょう。」と申しあげたところ、「それならば、そなたに取らせよう。」ということで御下賜みづかひあそばされたのだが、…(略)…

大体これは、世の中においておもしろいこと、人がすばらしいなごと思はざるのことについて、やはり選び出して、また、歌などについてをも、木や草や鳥や虫のことをも書き記してあるのならばこそ、「考えていたのよりはよくない。考えのほどもわかつた。」とそしられもしようが、そうではなくて、わたしの心の中だけで自然と考えることを、たわむれに書きつけてあるのだから、…(略)…

(「新編 日本古典文学全集」による)

〔注〕 史記——中国の歴史書。

男もすなる日記というものを女もしてみんとてするなり。

——男も書くと聞いている日記というものを、女である私

も書いてみようと思つて、書くのである。

御下賜あそばされたのだが——くださったのだが。

〔問1〕 Aの中の——を付けたア、エのうち、現代仮名遣いで書いた

場合と異なる書き表し方を含んでいるものを一つ選び、記号で答

えよ。

〔問2〕⁽¹⁾ それではどのような過程を経て、「枕草子」ができたかという

のがその次であります。とあるが、この発言にみられる話の進め

方の特徴として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 時代背景を踏まえて清少納言の性格を考察する中で、順序を示す言

葉を用い、それまでの内容や特色を聞き手と共に改めて整理している。

イ 清少納言と関わった人物の逸話を紹介する中で、新たな人物が存在

することを聞き手に対して暗示し、交友関係の広さを理解させている。

ウ 文学の分類を説明する中で、このあとに例として「枕草子」を挙げ

ることを示し、聞き手が内容を身近に捉えられるように配慮している。

エ 引用した「枕草子」の原文に即して話す中で、原文の最初の段落か

ら次の段落へ進むことを予告し、話の展開を聞き手に意識させている。

〔問3〕⁽²⁾ これが「枕草子」成立事情の一つであります。とあるが、ここ

でいう『枕草子』成立事情の一つ』について説明したものと

最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 清少納言は、下手と言われたり、馬鹿にされたりしないために和歌

ではない形で、見たことや思つたことをそのまま書こうと考えた。

イ 清少納言は、自然に関する和歌を草子に書いて、自分が文学を理解

している女性であることを、周囲に分かつてもらおうと考えた。

ウ 清少納言は、中宮定子から紙をたくさん貰うことができれば、物語

や日記を書いて、自分の文学的能力を発揮することもできると考えた。

エ 清少納言は、現代では私小説と呼ばれる作品と同じように、自らを

主人公として描く作品であれば、自分にも書くことができると考えた。

〔問4〕⁽³⁾ よもやとあるが、この言葉が直接かかるのは、次のうちのどれか。

ア 人が

イ 見ることは

ウ あるまいと

エ 思つて

〔問5〕⁽⁴⁾ たわむれに書きつけてあるのだから、とあるが、ここでいう「た

わむれに」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 大量に

イ 急いで

ウ 真面目に

エ 軽い気持ちで